



台風19号における原発避難者と地域住民の助け合い

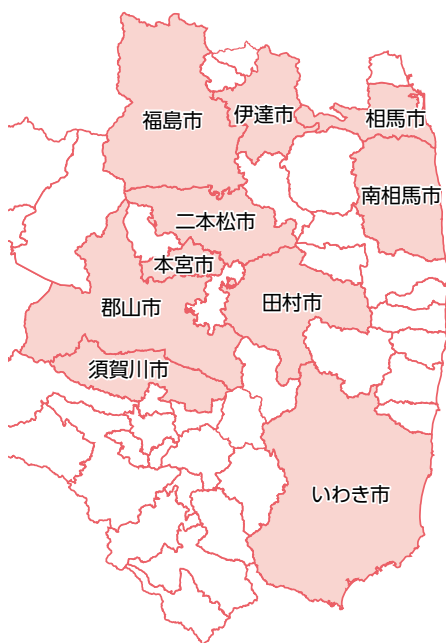
—避難先での防災と避難活動—



今回のポイント

- ① 台風19号発生時に、復興公営住宅集会所が避難所として機能
- ② 日常的な交流が、もしもの時に「共助」できる関係につながる
- ③ 防災活動が地域コミュニティづくりのきっかけになる

●原発事故の避難者が水害で被災した自治体



台風19号などの災害で
原発避難者が「二重被災」

全国で自然災害が頻発した昨年は、10月12日の台風19号と10月25日に発生した豪雨により、各地で大きな被害が発生しました。福島県内では死者32人、重軽傷者59人を数え、家屋の全壊1482棟、半壊12514棟、床上・床下浸水1605棟など、大きな被害をもたらしました（福島県災害対策課「令和元年台風19号等による被害状況即報 第84報」／令和元年2月25日現在）。

東日本大震災による原発事故の影響で県内に避難されている方は、台風19号で甚大な被害が出たいわき市や郡山市などに多く、いわき市の245世帯や郡山市の30世帯をはじめ、少

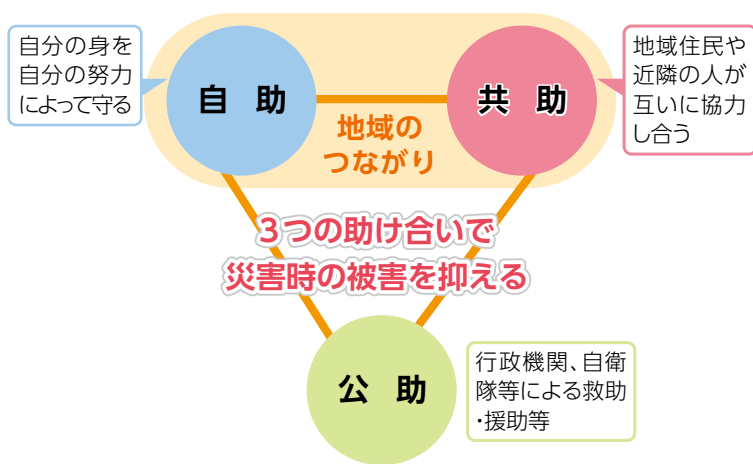
なくとも314世帯が避難先で再び被災しました。

地域社会でのつながりが
いざという時の力になる

こういった大規模災害が発生した際には、国や県、市町村の対応による「公助」の他に、自分の身を自分の努力によって守る「自助」、普段から顔を合わせている地域や近隣の人同士が助け合う「共助」こそが、災害による被害を少なくするための大きな力となります。普段できていないことを災害時に行うことは困難なため、自分のまちの危険な箇所を知っておく、近所づきあいや声を掛け合うなど、日頃からの地域とのつながりや心配りが、いざという時に力を発揮します。

しかし、津波や原発事故でふるさとを離れ避難している方は、初めて暮らす土地での生活になかなか馴染めなかったり、地域の人とどう関わっていくのか分からなかったりと、日頃からの住民同士

のつながりが課題となっています。今回の台風19号において、いわき市内郷にある復興公営住宅・県営宮沢団地（以下、宮沢団地）では入居以来培ってきた地域のコミュニティ力を発揮し、集会所が地域住民の避難所として機能しました。宮沢団地の「コミュニティ形成支援に携わったのは、NPO法人みんぷく（以下、みんぷく）です。次ページより、避難者の住まう宮沢団地と地域住民とのコミュニティづくりの取組みをご紹介します。





台風19号における原発避難者と地域住民の助け合い

インタビュー

台風19号発生時、宮沢団地自治会ではどのような対応を行ったかお聞きしました。



県営宮沢団地自治会
(いわき市) 会長
志賀 文清さん



NPO法人みんなぶく
スーパーバイザー
高梨 幸司さん

※福島県からの委託で、2014年から復興
公営住宅のコミュニティ形成を支援

—台風19号の際の、宮沢団地自治会の対応について教えてください。

志賀 まず入居者向けに注意喚起のチラシを全戸配布し、停電や断水に対する準備や、強風で物が飛ばないような対応の呼びかけをしました。宮沢団地は高台にあるため、直接的な浸水被害はありませんでしたが、地区の南北に宮川と新川という2つの川があり、宮沢団地より低い周辺の地域では、以前から度々浸水被害がありました。

高梨 そのため地域の方から宮沢団地自治会に対して、集会所を地域住民の避難所として活用させてほしいとい

集会所に飲料水などを準備し、避難所として活用していただいた



う要望が出ていました。万一の際には、団地の住民と地域の方が互いに支え合えるように、話し合う機会をつくり日頃から交流することが不可欠と、団地の皆さんにも伝えていました。そういった交流があったからこそ、今回実際に避難所として活用していただけたのだと思います。

—実際に避難されて来た方にどのような支援をされたのですか。

志賀 断水に備えて、集会所内に飲料水やトイレ用の水、毛布などを準備しました。避難者の中には車いすの方もいましたが、民生委員の協力で、安全に避難ができました。4名が集会所に宿泊されたほか、一時的に避難してきた方も10数名いました。

—10月25日にも豪雨があり、再び大きな被害が発生しましたね。

志賀 南北を流れる2つの川が氾濫したため、車が水没しないようにと、20数台の車輛が宮沢団地周辺に移動してきました。集会所を利用して、よいことを知らない人もいたので、雨の中、集会所周辺に駐車した車輛にいる方々に声を掛けて団地駐車場へ移動を促したり、トイレや着替えの場所として使ってくださいとお知らせしました。

高梨 子ども連れの方もいたようで、皆さん感謝されていたそうです。普段宮沢団地の住民との交流がない人でも、今回避難所として利用したことで、災害があったときに、ここを使っていんだということを広めるきっかけになったのではないかと思います。

志賀 地域の方を受け入れることが

できたのは、早期に動いたこともそうですが、これまで積み上げてきた関係があり、いい形で動いてきたからだと思います。日頃から顔を合わせていたことで自然と「共助」による活動ができたので、もっと多くの宮沢団地住民や地域の方がさまざまな活動に参加できるような取り組みをしていきたいと思っています。



日常的な交流が、もしもの時の「共助」につながる 防災活動が地域コミュニティづくりのきっかけになる

日常的に交流することで お互いの意思疎通が図れる

宮沢団地は、平成28年6月に入居が始まり、現在は浪江町や双葉町、大熊町、富岡町などから避難している68世帯が暮らしています。今年度、自治会長を務める志賀さんは、「ほとんどがここで初めて出会った人なので、コミュニティ作りが一番の課題でした」と話します。

そこに、県の生活拠点「コミュニティ形成事業を受託しているみんぷくがサポートに入り、自治会の立ち上げ時に必要な資料作成の手伝いや、宮沢団地で暮らす上で必要なルールのたたき台を提案するなど、入居者同士のコミュニティの基盤づくりを支援しました。

まずは、宮沢団地に隣接する集会所でカラオケ教室や手芸教室を開いたり、バーベキューや芋煮会などイベントを開催し、入居者同士の交流の場を設けました。団地のある内郷宮二区の区長や民生委員があいさつに来てくれ、懇談会を開催してからは、地域の方と

日常的な交流が始まりました。集会所でのカラオケ教室やお茶会に地区の方が参加したり、団地の住民が地区文化祭で手芸作品を出品したり、盆踊りに加わったりと、日頃から顔を合わせることが多くなったことで自然に交流が深まり、気軽に話し合える雰囲気が出てきました。

「団地の住民と地域の方が、お互いの考えを出し合うためにも、協議の場と日常的な交流は不可欠」と高梨さん。集会所を避難所として使用するなど、入居当初から地域の方から出ている要望事項もクリアできたことで、信頼が深まったと話します。

宮沢団地独自の訓練で 住民の防災意識を高める

地域交流をする中で、近年増えている自然災害への備えとして、住民の防災意識の高まりを感じると志賀さん。以前からいわき市が行う地域の防災訓練に宮沢団地の住民から数名が参加していましたが、「高齢者や障がいのある方は住まいから離れた場所での

訓練に参加することが難しいので、昨年からは団地内でも独自の訓練を行っています」と話します。

復興公営住宅の自治活動・運営の支援や地域交流支援に加えて、防災意識の醸成支援に力を入れているみんぷくでは、それぞれの団地の環境に合わせた内容で、独自の訓練をサポートしてきました。

宮沢団地においては、昨年9月、23名が参加して栃木県防災館への見学ツアーを実施。地震や大雨などの災害を疑似体験して、防災への意識を新たにしました。その後行った救急知識講習会では、緊急時に自分でも行動できるようにと、AEDの使い方などを学び、まとめとして行われた活動報告会には、見学ツアーや講習会に参加できなかった方も出席して活発な意見交換が行われ、とても勉強になったという声がありました。

こういった防災活動の積み重ねがあったことで、今回の台風19号と豪雨による災害では地域住民を集会所に受入れるための事前準備ができ、お互いに助け合う「共助」による避難活動を行うことができました。



防災関連事業のまとめとして開かれた「みんなで学ぼう防災・減災！活動報告会」で、防災意識を共有



AEDの使い方などを学んだ救急知識講習会

継続的な活動に組み込み 防災をより身近なものに

防災訓練は必要と分かっている、堅いイメージがあつて取組みにくいとの声もありますが、「定期的な行事に組み込み年間行事の一つにしていけば、より身近なものになります」と話す高梨さん。防災という誰にでも必要な切



「NPO法人みんなの取組み」 地域と共に暮らせる環境づくりをサポート

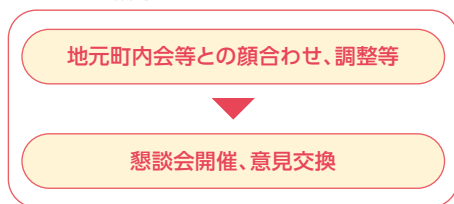
「みんなが復興の主役」をテーマに、支援をする人・必要とする人が知恵を出し合い活動することを目的に、2012年に設立された「みんな」。現在は復興公営住宅の自治活動・運営の支援や地域交流支援、防災意識醸成支援に力を入れており、いわき拠点ではいわき市内16カ所、広野町1カ所の団地で、住民が主体となったコミュニティ活動を、継続・維持するための取組みを行っています。

地元地域にとけ込むコーディネートを行う際には、復興公営住宅の住民と地域の方で協議の場を設ける必要があります。まずは、

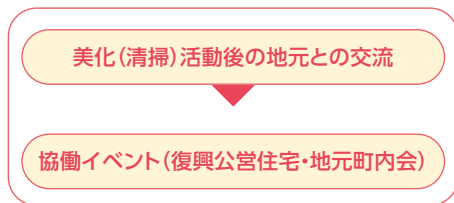
●地域とのコミュニティ形成の進め方



●STEP1 協議



●STEP2 交流



顔合わせや懇談会を開き、お互いの意見を聞き、何を求めているのかを知ることから始まります。次に、清掃活動などで交流をはじめ、お祭りなどのイベントを協働で開催します。何かをやって終わりでなく、必要があれば改善しながら、次につながるよう継続的な対話の場を設け、必要な情報を、知るために信頼関係を築くことを大切に支援しています。



宮沢団地の住民と地域の方が一緒に地域の魅力を再発見した「内郷さんぽ」

VOICE

何かあった時に頼れるよう、
顔見知りを作っておくことが大切



「何かあった時には、隣同士で知らせ合うことが大事」と志賀さん

宮沢団地内のイベントに地域の方を招くと、団地の住民だけで仲良くすればいいのではという声が上がることもあると志賀さん。そんな時は「災害などで宮沢団地だけで対応できない時、お世話になるのは地域の人なんだから、日頃から顔を合わせておくことが大事だよ」と話しているそうです。

また、仕事などさまざまな理由でイベントに参加できない人にも定期的に声を掛け、自身に何かあった時のためにも、顔見知りを作っておく

り口が地域とつながるきっかけになるので、それらをどう結びつけていくかが力ギになるといいます。また市内一斉清掃には参加するという住民も多いので、それに合わせて訓練を行えば参加率も高まり、これまで地域と交流がなかった世代が地域防災に関心を

持つきっかけになると、志賀さんも期待を寄せています。

将来的には、住民が自治会を自主運営できるようになることが大事と話す高梨さんも、宮沢団地での成功例を参考に、他の復興公営住宅にも展開していきたいと話していました。

ことが大事だと伝えているといいます。「宮沢団地の1階は高齢者や障がい者向けのバリアフリー仕様のため居室内に非常ボタンがあり、非常ベルの音に気づいた隣の人が救急車を呼んだこともありました。これも、普段から交流がないとできないことです」とコミュニティの大切さを話します。



復興公営住宅・県営宮沢団地